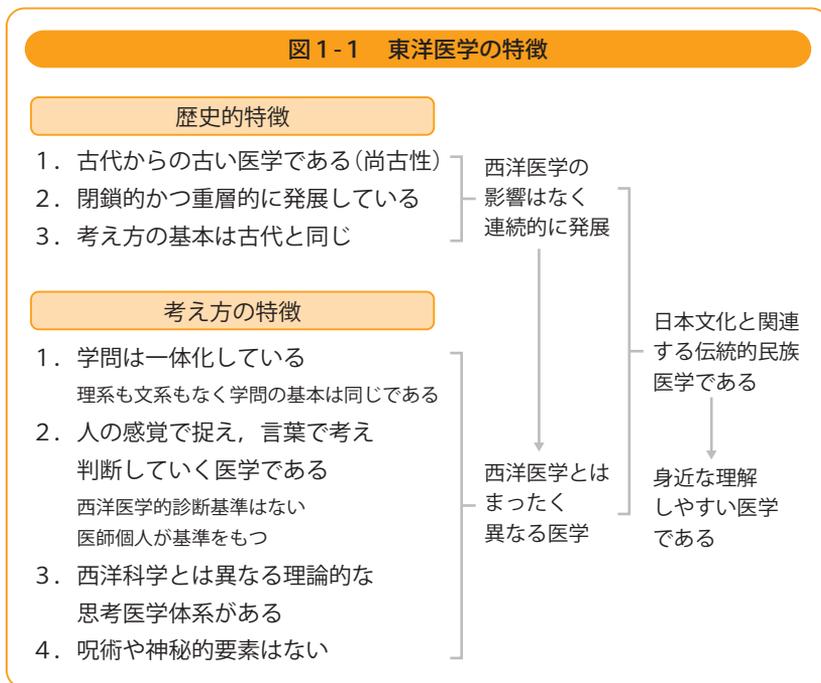


図1-1 東洋医学の特徴



また中国は、南にチベット、西にウイグル、北に蒙古と、周囲を異民族に囲まれた国である。当然これらの異民族とは交流があり、彼らから多くの漢方薬がもたらされた。柴胡・胡麻・胡椒など「胡」の字が付く生薬はその例といえる。ところが根本的な考え方は、ほとんど影響を受けることがなかった。

西洋医学がわが国や中国大陸にもたらされたのは、16世紀のことであるが、西洋医学の考え方の影響を受けるのは、わが国では江戸時代中期、中国大陸では19世紀のことである。

つまり東洋医学はほぼ2千年の長きにわたり、西洋医学や他の医学の影響を受けることなく、閉鎖的・連続的に発展してきた医学だといえる。換言すれば、基本的な考え方は古代と同じ医学体系であり、いわば古代

の医師と同じ考え方で討論が可能な医学というわけである。

この中国医学がわが国に入った時期は古い。562年、舒明天皇の治世に、智聡^{ちそう}（6世紀の渡来人）が医書を持参したとあるのが最も古い記録だといわれる。しかし実際はそれ以前から仏教とともにわが国に流入していたと推測される。いずれにしても古代から現代まで連続として続く、古い医学体系であることに変わりはない。

注1 『黄帝内経』：東洋医学理論の基本的理論が述べられている重要な書物。『素問』と『靈枢』の2部門から成る。『素問』とは医学の根本的な問題についての問答であり、『靈枢』とは人知でははかれない貴く重要なものという意味である。『素問』と『靈枢』は別の書物という学説もある。成立年代には諸説あるが、紀元前2世紀から紀元前後の間にあったいくつかの書物をまとめたものとされる。伝説上の皇帝（黄帝）と医師岐伯らとの問答で、生命観・疾病観・治療原則などが記されている。

column

中医学という言葉の意味するもの

現在巷間、「中医学」あるいは「中医」という言葉が飛び交っている。一体中医学という言葉はなにを意味し、どう使用されているのだろうか。中医学あるいは中医という言葉が、中国伝統医学の略であることはいうまでもない。一見古くから使用されていたように思える。確かに1915年頃にその使用例はあるが、同時に古医学・漢医方・旧医学などの言葉も使用されていた。中華民国19年（1930）、「中央国医館組織条例」によって国医と称することが決められている。じつは中医学という名称は、中華人民共和国（以後、共和国）成立（1949）以後に、共和国政府によって統一された言葉であり、古くからいわれていた言葉ではない。台湾（中華民国）では、筆者が台湾に留学した当時（1987～88年）、先の国医、あるいは中国医学が使用されていた。

最近、日本内経医学会の岩井祐泉先生から、中国人の日本思想研究者